

鈴木有郷牧師説教

5/23/10「心を騒がせるな」 ヨハネ14:8-10、25-27

私達は心を騒がせざるを得ないような状況に取り巻かれています。私は先だって

東京で小学生が自殺したという痛ましいニュースを新聞で読みました。その男の子はいじめの犠牲者でした。彼は次のような言葉を書き残していたそうです。「こんな人生、もう嫌だ。僕なんかいなくなった方がいい。」

若者も壮年の者も、心を騒がせざるを得ない状況と闘っています。学校での勉強のこと、職場での人間関係、家族の心配事、レイオフ等、数え上げたらきりがありません。

お年寄りも同じです。健康のこと、刻々と目の前に迫ってくる死のこと、自分の人生は塵と化してしまうのか、という心をえぐるような疑問等々、これも数え上げたらきりがありません。

老いも若きも、心を騒がせざるを得ない状況に取り囲まれている。これは否定することのできない事実です。しかしイエスは言われます。「心を騒がせるな。おびえるな。」これは一体どういう意味なのでしょう。

ここで言われている「心を騒がす」というのは、日常の状況に無関心であれ、ということではありません。不正義がまかり通る現実から眼をそらして、幸せという幻想を描きなさいということではありません。レイオフされることを心配したり、子供の将来のために蓄えたり、健康を気にすることが無意味だというのでもありません。

ここで言われている「心を騒がせるな」というイエスの言葉の意味は、いかなる困難の中においても、神は私のことを気にかけて下さっているのか、ということだけは絶対心配する必要はない、ということなのです。

今朝読んで頂いた聖書の箇所にはフィリポという人が登場します。彼は回りの不条理や不正義がまかり通る現実に関心をもち、神は本当に私達を心にかけて下さっているのか、と疑問に感じていたのです。神が本当に私達と共にいてくださることが分かれば、目の前の現実としっかりと向きあうことができるのだけれども、どうも一寸自信がない。これがフィリポの本音だったに違いありません。「御父を示してください」という彼の願いはそのことを意味しています。

イエスの答えは明白です。「私を見た者は、神を見たのだ。」イエスは、社会から仲間はずれにされていた、体に障害を持つ人、精神を病んでいる人、重い皮膚病に罹っている人々が、人間の思惑とは関係なく、神の慈しみの中に抱かれていることを、業と言葉で示して飽きることはありませんでした。

神はその彼等を愛して止まない。神は彼等と共におられる。これだけは絶対に心配する必要がないのです。「心を騒がせる」必要はないのです。イエスを見た者は、神を見たからです。

神は私達の味方です。だからいじめにあっても自殺することはないのです。病や死の現実を前にして生きる勇気を失うことはないのです。私達は、パラ色の人生を常に生きるという特権を与えられていません。しかし、いかなることが起ころうとも、死さえも私達の命を無意味なものにしてしまうことは絶対にないのです。

神にとって、私達は御子イエスの十字架に価する程に大切に、重いものなのです。神は私達を心にかけて下さっているのでしょうか？ 然り、然りです。神は私達の味方なのでしょう。そう、その通りです。

そのことを次の様な比喻を通して考えてみましょう。一人の人が砂浜に立って、自分の足跡を振り返ります。それは彼の人生の歩みを意味しています。彼の足跡の横にもう一人の人が共に歩いた足跡があります。イエスの足跡です。

しかし不思議なことに、イエスの足跡は、その人が苦難に直面した時期に消えているのです。人はイエスに尋ねます。「イエス様、何故あなたは私が最も辛い思いをしていた時、私から離れてしまわれたのですか。」

イエスは人に答えます。「私はあなたを一瞬たりとも離れてはいない。私の足跡が消えているのは、あなたから離れたからではない。私はあの時あなたを背負って歩いていた。」

イエスこそ我が望みです。我が櫓です。我が人生の錨です。